

# 僕らの事情



～寺島光介の場合～

澤村多門

## 序章

---

僕の名前は寺島光介。父親と二人暮らしの高校二年生だ。悩みは、年上の彼女のこと、成績のこと、女癖の悪い父親のこと。僕の日常は大体その三つで回っている。

まずは、年上の彼女の悩み。僕の彼女は3歳年上で、高校からエスカレーターで入った大学の理学部に在籍している。僕の幼馴染で、小さい頃からずっと大好きなお姉ちゃんだった。念願かなって、高校一年の春休みに付き合い始めた。でも「好き」という気持ちだけでは埋まらないこともある。最初からわかっていただけ、年齢の差だ。高校生の僕は、バイト禁止でお金はないし、車の免許も当然ない。大学生の彼女が望んでいるような付き合い方ができていないんじゃないかと、いつも不安になる。

それから、成績の悩み。僕の成績は中の上。父親のあとを継ぐかどうかは別として、僕は将来医師になりたいと思っている。そうすると大学は医学部に入らないといけない。今の成績では現役合格はギリギリだろう。

でも勉強が嫌いなわけじゃない。「こんなこと勉強して将来の役に立つのか」なんて言っているやつらがいるけど、僕にとってそれは大きな問題じゃない。サイン、コサインがわかっても、古文の文法がわかっても、それは日常には大きく影響しない。でも知るか知らないかで、人生を心豊かに過ごせるかどうかは変わってくる。だから僕にとって、毎日頭の中に新しいことが入っていくというのはとても楽しいことだ。

僕は勉強の手を休め時計を見た。夜の十二時になろうとしていた。今日覚えた英単語の成果をチェックしてにんまりする。頑張ったという充実感が好きだ。

耳を澄ますと、玄関のドアが静かに開く音がした。それから廊下を静かにこそこそと歩く音。僕の最大の悩みのご帰還だ。

「おかえり」と僕が顔を出すと、「ただいま。起きてたのか」と、父さんが言った。

せっけんの匂いがする。家に帰ってくるときの匂いは二種類。消毒液の匂いか、せっけんの匂いか。消毒液の匂いがするときには、こんな遅くまでお仕事お疲れ様、とねぎらいたくなる。でも、せっけんの匂いは。明らかにどこかの家で風呂に入ってきたということだろう。僕の年になれば、それが意味することぐらいわかる。

「いかにも、どこかのお宅で風呂に入ってきましたって匂いだよ。年頃の息子の教育によくないとか思わないの？」

父さんは笑ってキッチンの方に行く。そしてコップに水を汲んで一杯飲んだ。

「最近病院のそばにスーパー銭湯ができてさ」

どうでもいい嘘をつく。大人のくせに。いや、大人だからか。

「父さんのそれは、はっきり言って病気の域に達しているよ。言っとくけど、急に子供ができましたって言ってこられても困るから」

「大丈夫。その辺は気をつけているから」

しゃあしゃあと行って、父さんはネクタイをゆるめた。あっさり女の存在を認めやがって。

昔は理路整然と生命の神秘について語る産婦人科医の父をカッコいいと思った。僕が質問すれば、全部答えてくれた。ただ、僕も少し大人になり、父さんの本性を知ってしまうと、女好きのエロい医者としか思えなくなってしまった。

「まさしく、天職だよ。女の人が好きだから産婦人科医になったんじゃないの」

僕は冗談半分、軽蔑半分で言った。

「おいおい、誤解しないでくれ。診察の時に欲情するような変態じゃないぞ。まったく...私の仕事を何だと思っているんだ」と、父さんは顔をしかめた。

「ところで、明日、涼子に会う日だよな」

「そうだけど」

涼子さんは、僕の叔母だ。母さんの妹で、父さんと同じ病院で精神科医をしている。僕が小さいころに母さんは死んでしまった。だから写真の母さんの顔しかわからない。涼子さんの方がキツイ系の美人だけれど、何となく似ているので、僕は涼子さんに母さんの面影を重ねている。涼子さんも僕の面倒をよく見てくれて、二カ月に一度会うのが僕たちの決まりごとだった。

「ちょっと重くなって悪いんだけど、ワインを持って行ってくれないか」

「同じ病院で働いているんだから、ちょっと渡しに行けばいいだろ」

「ケチなこと言うな。病院では私だって忙しいし、涼子だって忙しい。科が違うと、あまり会う機会がないんだ」

「わかったよ。じゃ、おやすみ」

僕はそう言ってベッドにもぐった。

次の日、父さんはいつもどおり早く起きて、トーストを焼き、コーヒーを入れた。僕はコーヒーの代わりに冷たい牛乳をカップに注いだ。寺島家の朝は、何があっても二人で食事をとるところからスタートする。前日喧嘩をしたとしても、どれだけ気まずいことがあったとしても、朝に

は仲直りするのが暗黙の了解だ。

「これ、頼むな。上等なワインだと言えよ」

そう言って父さんは、きれいにラッピングされたワインの瓶を僕に手渡した。

病院のそばにある、涼子さんのマンションに行くと、彼女はラフな格好で出てきた。

「光介、いらっしやい。まああがって」

そう言うと、スタスタと中に入って行く。涼子さんは、さばさばとした姐御肌な人で、僕が幼馴染の彼女以外で緊張せずに話せる唯一の女性だ。

「父さんからなんだけど」

そう言って僕がワインを手渡すと、涼子さんはそれをまじまじと見た。それはラッピングに感心しているようでもあり、ワインの重さを味わっている風でもあった。

「周平、何か言ってた？」

ワインのラッピングを開けながら、涼子さんは僕に尋ねた。

「上等なワインだって」

「それだけ？まあいいか。上等には違いないわね。ありがとうって伝えておいて」

「ちょっと、僕は伝言板じゃないんだから、病院で直接言ってよ。贈り物をもらった時のお礼は、感謝をこめて本人に伝えてください」

「うーん、そうねえ。確かに光介の言うとおりにね」

そう言って涼子さんは笑った。笑うと右の頬にえくぼができる。僕は、涼子さんの笑顔が好きだった。

「そうそう、この近くにスーパー銭湯ができたのよ」

びっくりした。父さんが言っていたことが本当だったからだ。

「父さんも昨日そんなことを言っていたよ」

「今度二人で来ればいいじゃない」

「えー、この年で父親と風呂なんて」

「もう、そんな年じゃないか。私もおばさんになるわけだ」

テーブルの上に置かれたコップに麦茶が注がれる。おばさんと言っても、涼子さんはまだ三十を少し過ぎたぐらいのはずだ。まだまだそんな年ではない。独身だし。

「結婚しないの」

何気なく聞くと、「男の人って結婚の話をするとう逃げていくから」と言った。

「じゃ、何のために付き合うの」

「周平の子供にしては、ずいぶん真面目に育っちゃったわね」と涼子さんは笑った。

「男の人だといろいろあるんじゃないの？いろいろな人と付き合いたいとか。きっといくつになってももてたいのよ。まあやりたいだけかもしれないしね」

涼子さんは、最後にスパシーなことを言った。

「まあ、男はそうかもしれないけど、涼子さんは女でしょ」

「私の場合は、まあ、一人だと寂しい時があるから。その人とはずっと一緒にいたいと思うけど、言葉に出して関係が終わるのも怖くて、なかなか言えないのよ」

「でも、終わるってことは、そこまで愛されていないってことだろ。そんな恋愛に意味なんてあるの」

「きついこと言うわね。でも仕方ないわよね。好きになっちゃったものは。そういう気持ちも楽しいじゃない。相手を待ってドキドキする気持ちも」

「好きな人の子供を欲しいと思わないの？」

「光介がいれば十分。なんてたって、あんたは大好きなお姉ちゃんたちの子供だから」

「何だか、責任重大だな。僕」

冗談ぽく言ったけど、正直に言うと何とも言えない気分だった。僕は涼子さんにも幸せになってほしいのだけど。でも、人によって幸せの尺度は違うのかもしれない。子供がいるから幸せとか、結婚しているから幸せとか、そんなに単純ではないのかもしれない。

僕がまだ子供だからわからないのだろうか。恋愛の経験値が低いからわからないことなのだろうか。

僕は涼子さんが作った料理を食べ、それから成績の話をした。数学と物理は得意だけど、英語の成績が少し伸び悩んでいることを。涼子さんは、相槌を打って聞いてくれた。

時計が二時を回り、そろそろ帰ろうとしたところで、涼子さんはお決まりの質問を僕にした。眠れているか、気分が沈んで浮きあがれないと思うことはないか、過呼吸発作は起こっていないか。

「大丈夫。もう子供じゃない」

「大人でも起こりうることだから」

真剣な顔をして涼子さんは言ったけど、僕は笑って問題はないと言った。

家に帰ると、父さんは珍しくピアノを弾いていた。子供の頃はよく聞いたけれど、最近忙しいのか耳にしていなかった音だ。やわらかい音で、僕はほっとした。

「スーパー銭湯、本当だったんだね」

何気なく話しかける。父さんは、やっぱり嘘はつかない。少しだけ僕は見直していた。父さんは自慢げに、「そう言っただろう。聞くところによるとサウナはもちろん、いろいろな種類の風呂を楽しめるらしいぞ」と言った。

「らしいって、やっぱり行ってないんじゃないか」

ため息が出る。肝心なところが抜けている。

「ああ。光介は勘が鋭いね。またばれちゃったか」

まったく悪びれることなく、父さんは言った。

「相手の人が本気だったらどうするの。結婚してくれって言ったら」

「私はそういう人とは付き合っていない」

こういう男が女の敵なのだと僕は思った。涼子さんが言っていた、「いろいろな人と付き合っていて、いくつになってももてたい男。やりたいたけの男」の典型的な例が、目の前にいる。

「男の人って結婚の話をするとう逃げっていくから」

声に出して言ってみる。父さんは首をかしげた。

「なんだ、それ。父さんは逃げずに結婚しただろ」

「涼子さんが言ってたんだ」

「結婚したいのかな」

父さんが小さくつぶやいた。

次の日父さんは五時まで仕事だと言って、病院に出かけて行った。

僕は、幼馴染の北村郡司の家に遊びに来た。一番の目的は、郡司の姉であり、僕の彼女である、桜に会うことだ。

会う約束はしていないけれど、日曜日ぐらい予定を空けてくれているはずだ。ただでさえ生活のサイクルが合わないんだから。僕は、期待を胸に北村家を訪れたのだった。

もう昼を回っているというのに、郡司は今起きたばかりという顔で出てきた。そして、「姉ちゃんなら、サークル活動でいねーよ」と言った。

僕はひどくがっかりした。大学生は忙しいのかな。僕が会いたいと思うほど、桜は思ってくれていないのだろうか。

「そう、落ち込むなって。夕方には帰るから」

いつも通り郡司の部屋に上がりこむ。郡司は僕と違っておしゃれに気を使う。髪の毛もワックスでセットして、高校ではしょっちゅう女の子としゃべっている。まわりからも「遊び人」「女慣れしている」と思われている。でも、彼女はまだいない。

郡司の部屋のマガジンラックに無造作に置いてある、ファッション誌を僕は手にした。郡司がニヤニヤして僕を見る。

「何だよ。気持ち悪いな」

「色気づいたな。光介は素材が悪くないんだから、ちょっと髪の毛に手を加えて、眼鏡をコンタクトに変えれば、いい線行くよ」

そう言って、郡司は自分愛用のヘアワックスを軽く手に取り、僕の髪につけ、慣れた手つきで髪形をセットした。いつもはバカやっているけど、一つ年上というだけあって、時々大人に見える。

「ほら」

鏡を手渡されてしてみる。できるだけ表情を変えないように、「そんなに、変わってない」と言ってみた。郡司は僕の顔を見て笑った。

「彼女がしたいデートっていうのが、この雑誌に載ってたんだけどさ。こりゃー高校生にはきついな」

僕は、郡司に手渡された雑誌を見た。

1. ドライブデート
2. 日帰り旅行デート
3. 遊園地デート

彼女におごる昼食のことなどを考えたら、予算は五千円以上はかかりそうだった。

今は、テーマパークも入場料がかなりかかるから頻繁には行けない。

ドライブといっても運転免許さえ持っていない僕には無理だ。

僕はため息をついた。桜とは公園に行ったり、せいぜい、買い物に付き合うぐらいのことしかしてあげていない。博物館めぐりが好きみたいだから、今度誘ってみようかとも思うけれど、あまり若者という感じがしない。

「高校生向きじゃないよね。これ」

僕はそう言って、次のページを開いた。

—彼女とのセックス特集—

見なかったことにしよう。僕は雑誌を閉じた。

郡司は僕から雑誌を取り上げると、おもむろに開いた。

「気持ちいいんだろうな」

しみじみと郡司が言った。

「うん」

僕もうなずいた。

桜と付き合うようになって、半年。僕らはまだキスもしていない。どういうタイミングでキスをすればいいのか、いまいち僕にはわからない。

それに、例えばそういうことをしようとして、嫌われたらどうすればいいのか、下手だと思われたらどうすればいいのか。さすがにこればかりは郡司に聞くわけにもいかず、それが、僕の悩みを一層深刻にしていた。

頭の中のやましい妄想を振り切るように、僕は英語の問題集を取り出した。そして、英語が得意な郡司に、勉強を見てもらった。センスがないとはっきり言われて落ち込んだが、テクニックをいくつか教えてもらった。僕の英単語力には驚いたようで、同時に、なぜそんなに覚えているのにできないのか嘆いていた。

夕方になっても桜は帰ってこなくて、しづしづ僕は郡司の家を後にした。家を出たところで、男の車から降りる桜を見かけた。桜はすぐ僕に気づいて手を振った。僕は何だか気に入らなかつた。

「来てたんだ」

「郡司に英語を教えてもらった。誰？今の人」

「サークルの先輩」

「ふーん」

「ね、光介」

桜は僕に何かを言おうとしたけど、心の中にどす黒いものが渦巻いてしまって、僕は言葉を遮るように、「今日、父さんと約束があるから」と言って、その場を後にした。もちろん、父さんと約束なんてしていない。

「嘘をついてはいけません」

その言葉が頭のどこかに残っていて、耳の奥に響いた。

僕は、父さんと涼子さんが働いている病院に来ていた。三階の産婦人科棟にある医局を訪ねると、「北村先生は緊急の手術が入ってしまったから、もう少し時間がかかると思うよ」と顔なじみのお医者さんが教えてくれた。その場でお茶をもらい、僕はソファに座って待った。

病院独特のにおいがした。

僕は、さっきのどす黒い感情を思い出した。

嫉妬だ。

何とか抑えなければと思う。こんなことで桜を束縛しようとしたら嫌われる。相手は、ただのサークルの先輩なんだ。いや、でも、サークルの先輩だよ？きっと毎日大学で会っているに決まっている。絶対そいつの方が、僕より有利なポジションにいるんだ。

掌にじっとりと汗をかいて、呼吸が速くなるのを感じた。胸が苦しかった。口の中が苦い。

「おまたせ」

そんな僕を救うように、父さんの声がした。白衣姿の働いている姿は、いつも僕が見ている父さんとは違ってかっこよく見えた。

「引き継いできたから、今日はもう帰れるぞ。どうする、スーパー銭湯に行ってみるか」

「そんなに行きたいの？」

「たまには広い風呂に入りたいじゃないか。サウナもいいじゃないか」

僕は、ソファからゆっくり立ち上がった。

「いいよ、行こう」

父さんと一緒に風呂に入るのは、いつ以来だろう。小さい頃はよく風呂で遊んでもらったな。百まで数えるのが日課だった。

女たらしで、いまいち賤けられた記憶もないし、父親らしいところもないけれど、ここまで育ったということはそれなりに面倒も見てもらったんだ。

ふと、隣で体を洗っている父さんをまじまじと見た。この年の割には、腹も出ていないし、引き締まった体をしている。

顔を見る。この優男みたいな風貌に、みんな騙されるのかな。そんなことを思う。この年で、この顔で、仕事もできたら、もてるんだろうな。

「なんだ。じろじろと」

「いや、白髪が増えたなと思ってさ」

僕は、思っていたこととはまったく別のことを口に出した。

「増えたかな。染めた方がいいと思う？」

「僕に聞くなよ」

「誰に聞けばいいんだよ。光介しかいないじゃないか」

「まあ、彼女とかには聞けないよね」

「だろう？」

父親に「もてるためのアドバイス」をしている僕。世の中の親子って、普通こんな話をしているのだろうか。もっと、進路の話とか、友達関係の話とか、そういう相談をして、父親っていう

のはもっと威厳のあるものなんじゃないのだろうか。

僕と父さんは体を洗い終えて、大きな湯船につかった。

「再婚しないの？父さんにいい人がいるんだったら、僕は別に。おとといはあんなこと言ったけど、真面目に付き合っている人がいるんだったら、年の離れた弟や妹ができてもいいし」

父さんは湯船のお湯でジャバジャバと顔を洗った。

「母さんみたいに、先立たれるのはもう...な」

「若い人つかまえばいいじゃない。健康そうな人」

「父さんが、ケバイのとか、ギャル風とか、金使いの荒いのとか、家事が全くできないのを連れてきたらどうするつもりだ？」

「それは嫌かな。そういう趣味なの？」

父さんは笑った。口元と、目じりにしわができた。

僕らは外に出て、少し涼んだ後、サウナに入った。すごい熱気で、口を開くと、のどが焼けそうだったので、一言も口を利かず、もくもくと汗を流した。水を浴びようとしたところで、僕はめまいを覚えた。

気付くと、脱衣所の椅子の上に寝かされていた。首と、おでこ、脇の下がひんやりと気持ちがいい。父さんにスポーツドリンクを手渡された。口に含むと、人工的なグレープフルーツ味の苦さが広がった。

「馬鹿やろう。体調が悪い人は無理をしないでくださいって書いてあったろうが」

父さんは、一応医者らしく僕の脈を見ると、首と、おでこ、わきのタオルを変えてくれた。

「医者っぽいよね」と言うと、「医者なんだ」と言った。

「父親っぽいよね」と言うと、「当たり前だ。父親なんだから」と、怒ったように言った。

帰り道、父さんに桜のことを話した。

「桜ちゃんか。大学生の彼女とは、光介もなかなかやるじゃないか」と、しきりに感心していた。自分に打ち明けてくれたことがうれしいようだった。

「嫉妬は誰でもする。簡単に抑えられるもんじゃない。長く付き合いたいのなら、ケンカもすることだ」

父さんは、さも恋愛の熟練者であるように（実際そうなんだろうけど）、当たり前のことを偉そうに言った。

「言葉にして伝えないと、気持ちなんて伝わらない。待っていたら、取り返しのつかないことになる」

その言葉は久々に聞いた父さんの「教訓」だった。

ドラッグストアの前で足を止める。

「あのさ、整髪料がほしいんだけど」

「整髪料？父さんのでいいじゃないか」

「あんな、育毛剤が混ざったような奴じゃなくてさ」

「わかった、わかった」

僕らは連れだって、ドラッグストアに入った。父さんは、薬コーナーから始まって、シャンプー

一や、食料品コーナーまでぐるりと見ているようだった。

僕は整髪料のコーナーでどれにしようか迷った挙句、郡司に借りたヘアワックスと同じものを手に取った。気付くと、後ろに立った父さんが、「へえ、最近はこういうのが売れているのか」と、説明書きを読んでいた。

「私も使っていいかな」

「どうぞ」

僕は、ヘアワックスを父さんが持っていたかごに放り込んだ。

家に帰ると父さんは食事の準備に取り掛かった。

「光介、デート代ほしいだろ」

すぐに人の足元を見るようなことを言う。

「毎朝、食事の準備をしてくれたら、千円こずかいを上げてやるぞ」

「それだけ？」

「コーヒー入れて、パンを焼くだけだろうが」

「せめて三千円にならないかな」

「サラダ、目玉焼き付きで、二千円だ」

「和食にするから、三千円にならない？」

「和食か…。わかった。三千円で」

僕は、和食好きな父さんの胃袋をがっちりつかんでいる。

かくして、寺島家の家事全般は僕が引き受けることになってしまったのだった。

今朝から、食事は僕の担当だ。メニューは、じゃがいもとワカメのみそ汁、雑穀ご飯、サラダ、玉子焼き。初日だからこんなものだろう。今までは、毎朝コーヒーとトーストだけだったのだから、父さんも文句は言わなかった。朝は生徒会活動の掃除があるので、僕は父さんより先に家を出た。

家を出ると、門の外に桜がいた。

「おはよう。駅まで一緒に行かない？」

「うん」

学ラン姿の僕はどこからどう見ても高校生だし、一方の桜はどこからどう見ても女子大生だ。手をつないでいいものかためらったけれど、少し勇気を出して桜と手をつないだ。桜も柔らかい手で僕の手を握り返してくれた。付き合う前はもっとうまく話せたはずなのに、付き合い始めてから変に意識してしまって、うまく話せなくなった。元をただせば、幼馴染のお姉ちゃんなんだけど。

桜は、目立つタイプの美人ではない。でも肌の透明さとか、サラサラの長い髪とか、奥二重の目とか、少しだけ低い鼻、ぷっくりとした唇、彼女を構成するひとつひとつのパーツが好きだ。そんなことを考えていたら、また少し意識してしまって、手に力が入った。

「生徒会、楽しい？」

ようやく桜の先導で、会話が始まる。

「うん。先輩も、一緒にやっているやつらも、気の合うやつばかりで楽しいよ。朝の掃除も達成感があるし。朝の掃除、桜が役員だった時に始めたんだろ？」

「そうよ。冬の雪かきとか、雪合戦になって楽しかったな」

そう言って彼女が笑う。今、やわらかい風が吹いたような気がする。彼女が笑うと、何だかい匂いがするんだ。

「郡司が生徒会長っていうのが、いまだに納得できないのよね。光介が副会長っていうのはまだいいとして」

「郡司会長は、人気があるよ。それに、多少羽目を外しても、わきを固める僕らがしっかりしているから」

「そうね、光介も晶ちゃんもしっかりしてるから」

肩を並べて歩く。女の子にしては背の高い桜と、平均的身長の僕。高校時代の桜は、成績もトップクラスだったと聞いている。僕もひとつぐらい優越感を持てる何かがほしい。そんなつまらないことを考えた。

「昨日のこと、怒ってる？」

「僕以外の男と二人でいるっていうのは、いい気がしない」

遠まわしに言ったことで、逆に言葉に棘が含まれてしまった。言葉にだして見て、桜の表情を見てそれがわかる。

「車って密室だよ？男っていうのは何を考えてるか、わからないもんなんだ」

「先輩はそういう人じゃないわよ。光介みたいなことを考えるわけないでしょ」

「僕だって、まだ何もしてないじゃないか」

「少しは私を信用してよ」

そう言って桜は黙った。自分の感情をやきモチだと笑い飛ばせるほどの大らかさや余裕を、その時の僕は持ち合わせていなかった。

思っていることを伝えるのは案外難しい

放課後の生徒会室。背を伸ばすために欠かせないと考えている、パック牛乳を飲みながら、僕は科学雑誌を読んでいた。頭の中に、今朝の桜とのやり取りばかりが浮かんでくる。本の内容は当然ながら頭に入ってこない。

付き合う前、ひたすら桜のことを思って、いつ告白しようかとか、そんなことを考えているときが一番楽しかった。付き合うようになって、桜にふさわしい男になろうと、釣り合うようになろうとし始めてから、とたんにいろいろなことが窮屈になった。付き合うようになって変わったことはほとんどない。相変わらず、桜の考えていることは分からないままだ。

「それ、オモロイの？姉ちゃんに合わせようと、無理しなくていいのに」

郡司はそう言って、科学雑誌を取り上げた。

「面白いから読んでる」

僕はそう言って、雑誌をとり返した。郡司を見ると、手に旅行雑誌を持っていた。

「旅行？」

「そう。信州のペンション。夏は涼しくていいぜ。乗らない？」

「男の二人旅じゃないよな」

「もちろん女の子を誘う」

僕は、誰？という目をした。郡司の視線の先に、晶先輩がいた。いつから付き合っていたのだろう。頭の中に複数の疑問符が浮かぶ。

「これから付き合って、夏休みまでにはいい仲になる予定だ」

胸を張って郡司は言い、小声で、「そういうわけで、首尾よく姉ちゃんを誘うように。光介もこの方が誘いやすいだろ。泊まりだぜ、泊まり」と言った。

確かに、桜と二人で旅行に行くことを考えれば誘いやすい。それに父さんにも「友達と旅行に行く」と言えば怪しまないだろうし、僕自身も良心が痛まない。

「わかった。郡司も健闘を祈る」

「お前もな。早く誘わないと、サークル活動に先を越されるぞ」

喧嘩をしてすぐには誘いにくい。僕は何となく煮え切らない気持ちでいた。

「中間考査が終わったら、誘ってみる」

生徒会室に主要メンバーが集まった。今日の議題は、文化祭の生徒会イベントについて。郡司が、まとまりなく、「これをやりたい、あれをやりたい」と意見を出し、晶先輩が冷静に意見を却下していく。十個上がった意見のうち、一個が、「それは、検討してみてもいいかも」と言われる程度だ。晶先輩のクールさもすごいけれど、案を上げられる郡司もすごい。

書記の美和が「みんなはこういうことをやりたいはず」と生徒の意見を代弁し、会計の西先輩が意見をまとめる。適材適所というわけではないけれど、みんなが違った役割を持ち、お互いがそれを尊重しながらやっているからうまくいっているのだと思う。

僕は、晶先輩を見た。郡司のタイプは、もっと派手な元気のいい女の子だと思っていたから、すごく意外だった。晶先輩はいつも冷静で、少しのことには動じない。先輩ということを差し引

いてみても、大人に見えた。

「おい、光介。聞いてたか。俺の素晴らしい意見を」

もちろん聞いていた。

「宝探しでいいと思います。あまりしょぼい宝だと、やる気がなくなるので、10等ぐらいまではいい景品を出せるように、生徒会裏帳簿から何とかしましょう。西先輩、なんとかなりますよね。それから、恋愛企画も同時進行してみたらどうかな。美和の意見だと、みんなそういうのを楽しみにしてるでしょ」

僕の役割は、会長のやりたいことを具体化し、さらに改善することだ。この先はおそらく西先輩が金勘定も含めてまとめてくれる。

中間考査が終わった。僕は少しながら手ごたえを感じていた。郡司に言われた方法で勉強することによって、特に英語の長文問題に関しては、かなりいい線だと思う。

一方、そのほかの悩みの種はそのまま。

この前の喧嘩ともいえないような喧嘩の後、僕と桜は一応仲直りした。どちらかが謝ったというわけではなく、普段通り会話をするという程度だ。桜の家に行っても、郡司がいて、3人の会話になってしまう。それはそれで楽しいのだけれど、物足りなさも感じていた。

でも、郡司がいたから自然に仲直りができたというのものもある。やっぱり郡司には感謝しなければならない。

その日、郡司は図書館に出かけてしまい、僕は桜の部屋で桜と二人きりになった。

「夏休み、旅行に行かない？」

僕はようやく旅行の話を切り出した。

「いいね。どこに行く？」

意外にも桜はすぐその話に乗ってきた。

「信州のペンション。涼しくていいんじゃないかな。バーベキューしたら楽しいと思うし」

桜が笑顔になった。久々に見た気がして、とてもうれしくなる。

「夜は花火したいよね」

桜のほっぺが気のせいかわ少し赤くなった。僕はドキドキした。付き合ってから、こんないい雰囲気になったのなんて初めてだ。

僕は、桜にキスしたくなって顔を近づけた。このタイミングでいいのかな？

「二人で旅行なんて初めてだね」

桜に言われて、一瞬キョトンとする。

「いや、郡司と晶先輩と、桜と僕の4人の予定だけど」

「そ、そうよね。ごめん、ちょっと早とちりした」

僕が、二人で旅行に行こうといえ、オッケーしてくれたってことか。それはつまり。一気に僕は舞い上がった。

そしてそのままの勢いで、桜にキスをした。唇ってこんなに柔らかいんだ。

桜が少し反応してくれたことをいいことに、もう一度唇を重ね直して感触を確かめる。なんだか頭の中の回線が切れそうだ。

女におぼれる父さんの気持ちもわからなくない。こんなことしていたら、本当にそういう気分になってしまう。

ふいに桜に押し戻されて我に返る。切れかかっていた回線がつながる。

「初めてのキスで舌とか入れないでくれる？光介のくせに、エロい」

その言葉に少なからずショックを受ける。「光介のくせに」と言われたのもショックだけど、「エロい」と言われたのもショックだ。僕は今までできるだけそう思われないように生きてきた。こと、桜に関しては気をつけていたのに。よりによって本人に言われた。郡司に言われるなら、男に言われるならいい。桜に言われた。でも、ここで「エロい」と言われたら、この先の進展

はあるのだろうか。

僕が百面相をしていると、桜はいたずらっぽく笑った。

「桜こそ、僕と二人で旅行に行ってくれるつもりだったんだろ。僕より考えていることが進んでるよ」

「私は、花火したいねと言っただけです」

桜は胸を張って言った。

キスより先のこともしたかったけれど、僕は姿勢を正した。そして、桜とのんびり旅行について話した。桜はやっぱり郡司と似ていて、「あれがしたい、これがしたい」と、次々にいろいろなことを提案した。僕はその都度相槌を打ちながら、できそうなものとできなさそうなものを頭の中で仕分けした。

郡司が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり。桜も旅行行けるって」と僕が言うのと、郡司が「晶に、ふられた」と言ったのは、ほぼ同時だった。

いつも元気で自信満々な郡司が、がっくりうなだれている。

「もう予約取ってあるんだろ？どうするんだよ」

「別の人を誘えばいいじゃない」

「お前ら、俺はふられたんだよ。まずはそれを憐れめ」

郡司はなぜふられたのか。彼はひたすら、わからない、言いたくない、と言いつけた。これでは対策が立てられないじゃないか。

桜との仲がうまくいったと思ったら、一難去ってまた一難だ。僕の悩みの中に、「郡司の恋愛」の項目が一つ増えた。

嵐のはじまりだった。

その女は、突如、休日の我が家にやってきた。

「あの、失礼ですがどちらさまでしょうか」

僕の全く知らない顔だから、父さんに用があつてきたのだということはわかる。ただ、一体どういう関係があるのかわからない。年齢は、二十代前半。父さんの病院の人だろうか。

「寺島先生は、いらっしゃいますか」

僕が言った言葉には全く答えようとしない。すごい剣幕に押されて、僕は、「少々お待ちください」と言ってしまった。

父さんはソファに座って新聞を読んでいた。

「お客さんだよ。若い女の人」

「誰かな」

父さんが玄関に出ていく、僕も気になって父さんの後を追う。

「君か。休日に家にまで押し掛けてきて、どういう用件かな」

その言葉がすごく冷たく聞こえた。こんな話し方をしたっけ？

「妊娠しました」

「は？」

大きな声を上げたのは父さんではなく、僕だった。妊娠って、父さんとの間の子？

「ここではなんだから、上がりなさい」

父さんの口調がいつものように柔らかくなった。

女の方はゆっくりとソファに腰を下ろした。父さんは新聞をたたむとソファに座った。

「あの、お茶などをお持ちの方がよろしいでしょうか」

突然の出来事に、普段は使わない言葉が口から出てくる。

「光介いいよ。勉強でもしていなさい」

丁よく追い払われた。生々しい話を聞きたいわけではないから、これでよかったのだけど。

いつかはこういう日が来る気がしていた。父さんはだらしが無い。女の方の香水の匂いがしたり、せっけんの匂いがすることはざらだ。首元にキスマークを見つけたときは、余りの生々しさに引いた。

父親のこういう事情に悩む高校生は、全国にどれぐらいいるんだろう。考えるととても情けない。郡司には、「おじさんってカッコいいよな。もてるわけだ」なんて言われるけれど、もてるのと女癖が悪いのは別問題だ。そして僕は、後者に関しては大嫌いである。

女の方は一時間ぐらいいて帰って行った。僕は勉強部屋から出ると、父さんを思い切り睨んだ。

「説明しろよ。あの女の方が誰かはどうでもいい。聞きたいことは一つ。子供の父親は父さんなのか？」

父さんは顔色も変えずに、「私かもしれないし、そうじゃないかもしれない」と言った。

「認めるんだな」

「まあ、そういうことでした。今は市販の妊娠検査の段階だから詳しくは分からない。週明けに病院で検査をする」

「あの人のこと、ちゃんと好きなの？」

「恋愛感情はないな」

父さんが、とてつもなく冷酷で、どうしようもない人間のクズに見えた。僕とはずいぶん離れたところにいる。

「あんな派手な人が母親になる僕の身にもなれよ。しかもどう見ても二十代前半じゃないか」

「まだ、俺が父親だと決まったわけじゃない」

父さんは珍しく、自分のことを「俺」と言った。それがわかるくらいに、僕は冷静だったと思う。でも同時に心が沸騰していくのを感じていた。時々起こる、どうしようもなく息苦しい感覚。それもわかっていた。「キレル」というのとは違うと思う。ただ、混乱が抑えられなくなる。

「見境がなさ過ぎるんだよ。死んだ母さんに悪いと思わないのか。あの人、写真の母さんと全然違うタイプじゃないか。相手ぐらい選べよ。どうでもいい人と、寝るなよ」

息が止まったと思った。

父さんは見えているのに、すごく遠くにいる感じがした。

自分はすごく混乱しているようで、客観的に自分を見ているようでもあった。

「光介、ゆっくり息をして」

そんな声が聞こえてきた。

「大丈夫だ」

少しずつ状況が飲み込めてくる。僕は、紙袋を口に当てがわれていた。父さんが背中をさすっ  
てくれている。以前、涼子さんが教えてくれた。「過呼吸発作」を起こしたんだ。

「うん、うまいぞ」

父さんの声は、ドラマでよく見る出産シーンを連想させた。

父さんは僕の呼吸が落ち着くと、ホットミルクを持ってきてくれた。それから、誰かに電話を  
しているみたいだった。電話の後、僕の目を見て、「本当にごめん」と言った。

「僕ももう子供じゃないから、女の人と一緒にいたらそういう気持ちになるのはわかるよ。でも  
、地位もあるんだし、僕もいるんだよ。そういうのを大切にしようとか思わないの。僕は、父さ  
んにとって何なの。僕がいなければ、もっと自由でよかったってこと？」

「それは違う。光介のことは大切だし、光介がいなかったら」

そのとき、インターホンが鳴る音がした。

「誰か来たよ」

形だけの父さんの言葉を聞きたくなくて、僕は言葉を遮った。

小さい頃からいつもそうだ。

「お前が大切だ」

「お前がいて良かった」

「お前がいるから、頑張れる」

でも、実際はどうだ。

僕は思った。父さんが女癖が悪いのがつらいんじゃない。女たらしなのが嫌なんじゃない。僕がいるのに、僕の存在を無視して、自分勝手にやっている父さんが嫌いなんだ。自分自身のことも、僕のこと大切にしてない父さんが嫌なんだ。

入ってきたのは涼子さんだった。僕は、さっき父さんがかけていた電話の相手が涼子さんだったのだと知った。涼子さんは、僕の落ち着いた顔色を見てほっとしたようだった。

「ごめん。涼子さん。心配かけちゃって」

涼子さんは首を横に振った。

「光介が心配することじゃないの」

それから、父さんの方を見ると、思いっきり張り手をくらわせた。「バチン」と響くいい音がした。

「何してんのよ！一番大切なのは息子でしょうが」

父さんは全く反論せず、思い出したように頬をさすった。

「自分の家庭を壊してまで、女遊びしたいわけ？周平、言ったわよね。お姉ちゃんが死んだときに、光介は妻が残した大切な宝物だから、俺が大切に育てるって」

涼子さんの剣幕はすごかった。僕は、こんなに激した涼子さんをいまだかつて見たことがなかった。

僕の知っている涼子さんは、終始穏やかで、大人の女の人だった。でも、今の涼子さんは、こんなことを言ったら変だけれど、ずっとずっと子供に見えた。

「くやしい」と絞り出すような声を涼子さんは出した。

「どうして、どうでもいい女と子供作っちゃうのよ。どうして、私じゃ駄目だったの。私なら、誰よりも光介を愛せたのに。どうして私との間にはできなかったのよ」

僕は、二人を傍観していた。

— 光介で十分。なんてたって、あんたは大好きなお姉ちゃんたちの子供だから —  
僕が、子供は欲しくないのかと聞いたときに、確かに涼子さんはそう言った。

すべてが繋がった。

涼子さんは、僕を愛し、僕の母さんを愛し、そして父さんを愛した。涼子さんの恋愛の相手は、父さんだった。結婚したいと思ったのも、ずっと一緒にいたいと思ったのも、父さんのことだった。

僕が知らないところで、二人は大人の関係になっていた。想像すると抵抗はあるけど、僕ももう子供じゃない。そこは百歩譲って許そう。ただ、父さんが涼子さんを傷つけたことは許せない。

僕は父さんの胸ぐらをつかんで、ソファに思いっきり引き倒した。そして、そのままグーで顔を殴った。父さんの表情は変わらなかった。

「なんで涼子さんまで傷つけるんだよ！僕の大切なおばさんだぞ！父さんにとっても大切な人だろ！父さんは、おかしいよ。狂ってるよ」

何も言わない父さんをもう一発殴ろうとして、涼子さんに止められた。僕は握りしめた拳を下ろした。拳から血が出ていた。人を殴るって痛いことなんだな。

父さんの目から涙があふれた。静かに、あとからあとから、まるで湧き出てくる泉のようにそれはあふれてきた。父さんは、涙をぬぐおうともせず、僕の目を見ていた。いや、僕の目では

なく、僕の目の奥にある何かを見ていた。

「泣くなんてずるいだろ」

そう言って初めて、僕は父さんが泣いたところを初めて見たということに気付いた。

「苦しいよ。光介」

少しかすれた低い声で父さんが言った。

僕は涼子さんに促されて、父さんから離れた。父さんも目をこすって、涙を拭いて、体を起こした。

「顔はやめてほしかった」と、この期に及んで父さんは言った。僕は、父さんに氷嚢を投げつけた。

「ごめん、涼子。光介と二人で話をしたいから、帰ってもらってもいいかな。それから、俺は光介の言うとおりに、おかしくなってる。助けてほしい」

涼子さんは今、父さんのことをどう思っているのだろうか。情けない男、弱い男、最低な男、と思っているだろうか。その表情からは想像ができない。

ただ、涼子さんはソファに座った父さんに視線を合わせて、「大丈夫。私がなおしてあげるから」と言った。

「うん、ごめん」と父さんが力なく言い、「ありがとうって言ってよ」と柔らかい表情で涼子さんは言った。

愛する人を見る女性の顔なのか、傷ついた患者を診る医者顔なのか、僕にはわからなかった。

父さんと二人きりになった。いつもは気楽な二人暮らしなのに、今日は二人でいることがきつい。

「いつから涼子さんとそんなことになっちゃってたの」

「涼子とは一度終わっているんだ」

始まりを覚えてくれない代わりに、終わりを教えてくれた。僕は全く知らなかった自分のめでたさを少しだけ呪った。

「仕事で、すごく落ち込むことがあって、父さんお酒を飲んで、その勢いで」

「涼子さんはそこらへんの人と違うだろ。なんでそんなややこしいこと。サイテーだな」

「返す言葉もないよ」

父さんは、うなだれた。

「大体。酔っ払った時の関係をどうして続けるんだよ。ずるいだろ、それ」

「止められなかった。好きになっちゃったんだ」

「それ、僕じゃなくて、涼子さんに言ってあげたら」

「母さんのことも愛しているんだ」

父さん、それは欲張りだよ。母さんは、もういないじゃないか。死んだ人を愛している父さんは美しいって言って欲しいのか。やっていることは滅茶苦茶なのに、情けないよ。

それに。好きな人に「好きだ」って気持ちを伝えられない父さんは、もっと情けないよ。

「母さんを愛しているのに涼子さんと関係を持って、涼子さんを好きになったのに、どうしてほかの人と。僕にはそれが理解できない」

「仕事をしていると、時々死んでしまった凧子を思い出した。たまらなかった。生きていることを確認できればそれでよかった。相手の体温や、生きた肉体の柔らかさ、心臓の鼓動を感じたかった。俺も快楽を感じることで、生きていることを実感したかった。誰でもよかったんだ。凧子を思って抱いた。凧子が欲しかった。涼子を利用するわけにはいかないと思った。涼子を愛してしまったことに対する凧子への贖罪の気持ちもあった」

父さんは、今でも死んだ母さん、写真の中の「凧子」という女性を愛している。同時に母さんの妹の涼子さんも愛している。その複雑さが、父さんのバランスを一層崩していた。父さんは、自分勝手に、欲張りで、弱くて、そして大馬鹿だ。

「母さんはもう死んでいないんだよ。大切なのは、生きている人間だよ。今一緒にいる人だよ。大切にできるのはこの時だけなんだ。操を立てる相手を間違えるな」

僕は、氷嚢の氷を取り換えた。父さんの顔の腫れは少し引いていたけれど、多分少し青くなるだろうなと思った。

「なぐってごめん。それから、ずっと苦しんでいたの、気付けなくてごめん」

父さんは首を横に振った。

「俺の方こそ、威厳がなくて、しかもこんな不始末を...」

父さんが謝って、ことの始まりを思い出した。

「そうだよ。おい、正座しろ、正座。四十過ぎた、いいおっさんが避妊しないってどうなんだよ

。そもそも、父さんは専門家だろ！」

「いや、避妊はしてるんだ。気をつけたんだ。その結果なんだ」

しどろもどろになっている父さんに、僕はここぞとばかり説教をした。

妊娠騒ぎはあっけなく幕を閉じた。

月曜日、仕事から帰ってくると、父さんはネクタイをゆるめただけで、缶ビールを手に取り、のどを鳴らして一気に飲み干した。僕は一部始終をドキドキしながら見守った。

「私の子供ではなかった」と父さんは言った。そして、冷蔵庫からもう一本ビールを取り出した

。

「ひどいと思わないか。前に付き合っていた奴との子供を、私の子だと偽ろうとしたんだぞ。まったく、女というのは」

腹を立てているのか、ほっとしたのか、父さんは大きく息を吐いた。

「自業自得だよ。自分だっていい思いしたんだから」

「いい思いもさせたぞ」

「ひどいことしたっていうのも忘れるな」

「ハイ」

気まずかった空気が少しだけ戻っていく。それが、少しだけ僕の気持ちを楽にさせた

父さんはさすがに反省したらしく、とても真面目になった。遅くなっても、体からは消毒薬の匂いしかない。時々、煙草とお酒の匂いが混ざることもあるけれど、以前のように香水臭さを連れて帰ってくることはなくなった。

家事はほとんど僕がしていたけれど、今では手が空いているときに掃除や洗濯もしてくれる。僕の悩み「女癖の悪いの父親」は、解決されつつある。

でも少し深刻な問題が残った。涼子さんとのことだ。それから、父さん自体のメンタリティも不安だった。

「父さん、本当に行かないの？」

今日は、あの事件以来、久々に涼子さんに会う。

「病院で会っているからいいよ。週に一回、涼子先生のカウンセリングを受けています」

「そんな事務的な関係じゃなくてさ…」

「子供は親に気を使わなくてよろしい」

ぴしゃりと言われて僕は家を出た。

涼子さんは夏らしいワンピースを着ていた。雰囲気がとても柔らかく見える。口紅が淡い色のせいだろうか。

「ごめんね。光介に黙って、何というかそういうことをしてしまって」

涼子さんは、最初にそう謝った。

「いや、ちょっと意外ではあったけど。父さんに問題があったわけだし。もっと涼子さんを大事にしろっての」

僕は一方的に涼子さんをかばった。この件に関しては、完全に被害者は涼子さんだと思うからだ。涼子さんは首を横に振った。

「こういうのはどっちが悪いとかはないの。周平は仕事で辛いことがあって、お酒を飲んで酔っていた。私が弱みにつけ込んだのよ。私も、周平を利用したの。周平のことが好きだったから」

好きなら、好きって言えばいいだけの話なのに。大人ってというのは、どうしてこうややこしいんだろう。

「父さんのこと、今でも好き？」

「ずっと好きだったのよ。簡単には嫌いになれない。でも、どうかな。今回のことは、私にとっても簡単な問題じゃないからね」

涼子さんは、思案した。

「はい、この話はもうやめ。これ以上子供には話したくありません」

そう言って、涼子さんは話を打ち切った。

「父さんのこと、助けてあげて」と僕が言うと、涼子さんは胸を張って、

「まかせて。わたしは自分で言うのもなんだけど、立派な精神科医だから」と笑った。

家に帰ると枝豆をゆでているようないいにおいがした。予想通り台所に行くと、父さんがビール片手に枝豆をゆでていた。

「うまそうだね」

「もうすぐゆで上がるぞ。手を洗ってこい」

僕は洗面所に行って手を洗いうがいをした。眼鏡をとって顔を洗う。鏡で自分の顔を見る。何か父さんに顔が似てきた気がする。眼鏡をかけていない僕の顔は、父さんの顔を若くしたような顔だ。父親の遺伝子が、こういうところに受け継がれる不気味さを感じる。

居間に行くと、ゆで上がった枝豆が器に盛られてあった。

「なんだ、浮かない顔してるな」

「父さんに顔が似てきたと思って」

「当たり前だろう、私が父親なんだから。ちょっとまで、どうしてそんなに嫌そうなんだ。失礼な奴だな。父さんの顔は人並みじゃないか」

僕は麦茶をコップに注ぐと椅子に座った。枝豆を手に取り口に入れた。

「涼子さん、父さんのことを『弱虫のサイテー野郎だ』って言っていたよ」と、僕が思っているだけのことを伝えると、父さんは、「当たっているな」と苦笑いをした。

「涼子さん、泣いてたよ。もう男なんて信じないって」

「信じなくてよろしい」

「父さんに利用された。だまされたって」

「迫真の演技だけど、涼子はそういうことは言わないよ。泣いてなかったら？」

僕のついた嘘をあっさり見破り、父さんは笑った。そこまでわかっている、どうして涼子さんの気持ちに気づかないんだろう。見透かすぐらい、涼子さんのことを分かっているのに。

父さんはビールをうまそうに飲み干した。僕は、空になったグラスにビールを注ぐ。

「実際のところ、涼子さんのことはどう思ってるの」

「好きだよ」

「はっきり言うなよ、恥ずかしいな。もう酔ってるのか」

父さんの顔色は全く変わっていない。むしろ麦茶を飲んでる僕の方が赤いくらいだろう。

「光介が言いたしたんだろうが。真面目に答えたのに」

枝豆をつまみながら目をそらされる。

「誰でもよかったなんて言ってたけど、違うんだろ。涼子さんに関しては。どうして本人に言ってあげないんだよ。一回や二回じゃないだろうに」

父さんは顔を赤らめた。

「何の話だ。回数を聞くな、生々しい。子供にそこまで話したくはない」

父さんが違う方向に言葉を受け取ってしまい、ため息をつきたくなる。一体普段から何を考えているのだろう。僕だって父親の性生活を聞きたいわけじゃない。涼子さんが、前に「ずっと一緒にいたいと思う」と言っていたから、少なくとも一度きりの関係ではないと思っただけだ。

「一回伝えたよ。でも、涼子はさ、一度だって俺に好きだって言ってくれないんだ」

「何度でも言えって」

「俺の方から終わりにしてしまったんだ。それに、しつこいのは、嫌われないかな。ただでさえ、こんなことしたのにさ」

「一回リセットして、もう一回始めればいい」

「リセットって、ゲームじゃないんだから」

「ゲームじゃない。だから、思い出も含めて、いいこと全部記録されてるだろ。挽回するチャンスなんていくらでもある」

自分の気持ちを言えない臆病な大人たち。僕は少しでも二人の恋の役に立てただろうか。

ここに一人の不幸な人間がいる。この世の終わりという顔をしている。期末考査の結果が良くなかったのだろうか。郡司は受験生だ。進路のこともいい加減考えなくてはならないだろう。

「今まで何も聞いてなかったんだけどさ、郡司って将来の夢とかあるの？」

「ない。お前と違って明確な目的を持って生きていない。とりあえず、いい大学には入りたいけどな」

僕は少し意外だった。普段の郡司はあれだけやりたいことがたくさんあるのに、どうして将来やりたいことがないんだろう。

「晶にも軽蔑された。中途半端だと」

「振られた原因って、それなの？」

「いや」

郡司は言葉を濁した。

「安心しろ。旅行には行ってくれるみたいだから」

僕は階段の前で郡司と教室を別れた。郡司が、廊下にいた女の子たちに元気に声をかける姿を僕は見送った。

放課後、自動販売機で牛乳を買って生徒会室へ行くと、すでに晶先輩が来ていた。

「晶先輩、おつかれさまです」

「ああ」

僕は、生徒会メンバーの中で、晶先輩が少しだけ苦手だ。

「画集ですか？」

「郡司が見たいと言っていたから、市立図書館で借りてきたんだ」

さて、郡司は美術に興味があっただろうか。僕は晶先輩に言って画集を見せてもらった。正直言って、僕にはさっぱり良さがわからない。この絵が意味することは。

「どう思う？」

「すみません。僕は絵がよくわからなくて」

晶先輩は僕をにらんだ。

「わかる、わからないを聞いているんじゃない。知識なんてどうでもいい。どう思うかを聞いているんだ」

怖い。やっぱり、苦手だ。

「この絵は何を表したいのかわからないから、見てると不安になります。それから、これぐらいの絵なら、僕にも描けそうな気がします」

「そうだね。私もこれぐらいの絵なら描ける気がする」

晶先輩の口調は、ようやく普通に戻った。

「光介は、この絵は好き？」

「僕は、嫌いかな。きれいだとか、うまいなとか、見ただけでわかる絵の方が僕は好きだ。晶先輩は好きなんですか？」

「私は、こういう目で見えてわからないものも好きだ」

そう言って、晶先輩は次のページをめくった。また感想を求められるのだろうか。僕は少し身構えた。晶先輩が笑う。

「ごめんごめん、困らせるつもりじゃなかった。ただ、話しているときにわからないと言われると、会話が止まってしまうから。私はそういうのがあまり好きじゃないんだ」

僕は、桜のことを思い出していた。桜と話しているときもよく「どう思う？」と聞かれて、「僕は知識がないから、わからない」と答えていた。桜はきっと自分の知識をひけらかそうとしたわけじゃない。僕の意見を聞いて、同じ意見や、違った意見を共有したかったんじゃないだろうか。僕の方から、桜と距離を置いてしまったことがあったんじゃないだろうか。

「教えてくれてありがとうございます。桜は何も言わないけど、僕のそういうところは退屈に思っているかもしれない。これから、もうちょっと考えるようにします」

「光介は、本当に真面目だね。優しいし、年の割に人間ができてる。嫌味なところもない。かなわないね」

「褒めても何も出ませんよ」

晶先輩は真面目な顔をしてこう言った。

「私が好きなのは、桜先輩なんだ。」

僕は何を言ったらいい？どうやってフォローしたらいい？恋敵の出現。しかもそれが女の人っていう場合は、どう対応すればいいんだろう。マニュアルには絶対載っていない。

「すみません、対応できるほど、人間ができていません」

素直に僕は言った。

「冗談だよ」

晶先輩は笑って言った。決して晶先輩が僕をからかったのではないことぐらいはわかる。晶先輩はそんな人ではない。

生徒会活動の後、郡司は一度家に帰り画集を置いてくると、僕の家に来た。晶先輩から借りた画集をととても大切そうに持っていたのが印象的だった。

「意外だったんだけど、絵に興味があるの？」

「いや、興味があるわけじゃないけど、あの画家の作品が好きなんだ」と郡司は言った。

僕は郡司に麦茶の入ったグラスを手渡した。

「郡司が振られたわけ、わかってしまった」

「ああ」

郡司は気のない返事をした。

「俺さ」

郡司は麦茶を一気に飲み干すと、テーブルにコップを置いた。

「女が女を好きになるなんて、絶対にありえないだろって言っちゃったんだ。すごくひどいことを言ったのかもしれない」

僕らは二人で大きくため息をついた。雑誌を見る気にも、テレビを見る気にもなれなかった。僕だってフォローできなかった。特殊なんだ。出会ったことがないんだ。対応なんて難しい。

でも腹だけは減った。食べて元気だけは出さないといけない。僕と郡司は協力してカレーを作った。カレールウが溶けた頃、父さんが元気良く帰ってきた。

「ただいま。お、郡司、久しぶりだな」

「おじさん、こんにちは。お邪魔してます」

「光介、今日のカレーは辛口？」

「そうだよ」

「いいねえ」

鼻歌気分で奥に消えていく。

「おじさん、カレーが好物なのか？」

「うん。目がない」

僕はご飯とカレーを盛りつけ、テーブルに並べた。郡司と席についていると、部屋着に着替えた父さんが入ってきて、椅子に腰を下ろす。

「いただきます」

三人で言って食べ始める。男三人の食卓はすさまじい。サラダボウルはすぐに空になり、父さんと郡司は三杯もカレーのおかわりをした。

「父さん、もう中年なんだから、そろそろ節制しないと」

「なんだよ、中年って。確かに青年と言うほどおこがましくはないさ。ただ、面と向かって言われたくはないぞ」

「太ると幻滅されると思うけどな」

「光介、お前、俺の弱みを握ったと思って、最近調子に乗りすぎだ」

郡司が、「あー、いいよな。年の離れた兄弟みたい。俺も、おじさんみたいな兄ちゃんが欲しいな」と言った。

「僕は、もっとまともな父親が欲しいけどね」

「いや、おじさんはちゃんと父親をしていると思う。光介が小さいころから知ってるから、それはわかるよ。両親がいる俺なんかより、光介はずっとまともに育ってると思う」

父さんは目を細めた。

「私から見たら、郡司だって十分いい子だけどね。で、なんだ？二人とも腹がいっぱいになったのに浮かない顔をしてるな」

父さんにはかなわない。

郡司は名前こそ出さなかったけれど、晶先輩との間のことを話した。その中には、僕が知らなかったこともたくさん入っていた。父さんは、僕と話するときと同じように相槌を打ちながら聞いた。

郡司は、最後に、「俺はどうしたらいいのかな」と言った。

父さんは、それに対して、「どうしたいんだ？目標がなかったら、解決方法なんてないだろう」と言った。郡司はそれに答えなかった。

「おじさんがもし俺の立場だったら、彼女になんて言った？」

「郡司と同じことを言ったと思うよ。もっとひどいことを言ったかもしれない。でも言った言葉は戻ってこないから、これから取り返すしかない。一応、友達関係としては修復しているだろう。それでよしという手もある」

「俺は、そのことを知っても彼女のことを好きなんだ。傷つけたことは謝りたいし、自分の気持ちが変わっていないことも伝えたい。一緒にいられる間は一緒にいたい」

郡司はそこまで話して、「ありがとう。どうしたいのかも、どうしたらいいのかもわかった。難しいかもしれないけど、信用してもらえるようにやってみるよ」と言った。父さんは満足そうにうなずいた。

郡司が帰った後、父さんが皿を洗い、僕がそれを拭いた。

「郡司から見ると、父さんってまともに父親をやっているように見えるんだね」

「まともだろう？真面目に働いて、お給料はうちに入れてる」

「そうだけどさ」

「光介は、その年でこの家の生活費のやりくりをし、炊事、洗濯、掃除、すべてを卒なくこなせるようになった。今、俺が死んでも、光介は立派に生きていける。そういう風に育てた俺って、なかなかすごい父親じゃないか？」

「父さんが何もしなかったんじゃないか」

口ではそう言ってみる。

でも、包丁の使い方を教えてくれて、一緒に料理をしたのも父さんだった。父さんと料理をする時間が楽しくて、僕は料理を覚えた。洗濯ものをたたむと、それが下手でも褒めてくれた。父さんはきれい好きで、几帳面だから、それを見て整理整頓は覚えた。毎月決まった金額のお金を僕に渡してくれて、余ったらこずかいにしろと言ってくれたのも父さんだ。結果としてほとんど余ったことはないんだけど。

「簡単に死ぬとかいうなよ」

「いつかは死んでしまうからな。お互い、それは覚えておこう」

苦い気持ちになった。いつかはいなくなってしまう。そうしたら、こうやって憎まれ口をたたく人もいなくなる。僕一人になる。その人を大切にできるのは、一緒にいられる今このときだけ。

「安心しなさい。幸せの絶頂期に死ぬほど、父さんは間抜けではない」

父さんは明るく言った。

「郡司が来ていて、大切なことを言い忘れるところだった。父さん、涼子にプロポーズした。それで、良い返事をもらえたから」

「本当に？」

「ああ、嘘はつかない」

父さんは得意そうに胸を張った。

その後、郡司は晶先輩に正面から向き合っている。郡司と晶先輩の関係は、全く変わりがないというわけではいようだ。

ただ、なかなか旅行の話を持ち出すのに苦労して、結局旅行は、秋の大型連休にすることになった。

それでも、生徒会室で旅行の話をした時、晶先輩は郡司と楽しそうに話していたから、二人の関係は修復したのだろうと思う。

父さんと涼子さんの関係も表面上はあまり変わったようには見えない。ただ、涼子さんは、僕らの家に時々遊びに来るようになった。それから、休日に父さんが外出しているところをみると、おそらく二人でデートでもしているのではないかと思う。

「じゃ父さん、僕は明日早いからもう寝るよ」

旅行の前日のことだ。

「光介、ちょっと待ちなさい。渡したいものがある」

父さんは、思い立ったように椅子を立つと別室に行き、戻ってきた。とても機嫌がよさそうだ。こずかいをくれるつもりだろうか。珍しいこともあるものだ、明日雨が降らなければいいけれど、と僕は思った。

父さんは僕にそれを手渡した。小さな箱だ。

「何、これ」

「中を見ればわかる」

少しだけ嫌な予感がした。箱を開けると、中から出てきたのは五個つながったコンドームだった。

「どの世界に、旅行に行く子供にこんなものを持たせる親がいるんだよ」

「父さんなりに釘をさしているつもりなんだが」

「郡司も、先輩も一緒なんだ。そんなことするわけないだろ」

僕は、父さんに箱をつき返した。

「父さんこそ、僕がいない間、涼子さんと過ごすつもりなんだろう。必要なのは父さんの方じゃないの？」

僕も父さんに釘をさしてやった。これなら、父さんだってあからさまに涼子さんを誘わないはずだ。

「父さんたちは、もう結婚するつもりだから、必要ないんだけどな」

百歩及ばず。

父さんはもう片方の手を僕に差し出した。

「今度は何」

父さんが握らせてくれたのは、一万円札だった。

「もらいすぎだよ」

「そう思ったら、土産に地酒でも買ってきてくれればよろしい。そういうわけで、父さんは涼子

と楽しいひと時を過ごすから、光介君もせいぜい健闘したまえ」  
えらそうに。この前まで、情けない顔をしていたのに。  
でも僕は、このちょっとえらそうなくらいの父さんが好きだ。

僕と桜、それから郡司と晶先輩の四人は、高速バスを利用して、信州のペンションに来ていた

。ペンションのオーナーは、四十代くらいのおじさん。髪が少し薄いし、お腹は出ているけれど、多分、父さんと年はあまり変わらないんじゃないかと思う。彼は、少し...いや、確実に十歳は年上の奥さんと、ペンションを切り盛りしていた。

オーナーは、僕らに溪流釣りの竿を渡してくれた。それから、釣りの穴場を教えてくれた。奥さんは、「バーベキューと、お料理の準備をしておくから、楽しんでらっしゃい」と言った。物腰がとても柔らかい人だ。

釣りというのは、ひたすら待つ。僕は、桜と並んで糸を垂らしていたのだけれど、桜は釣れないことにいらついて、ポイントを変えてしまった。

そんなわけで、僕は一人、釣り糸を垂らして魚がかかるのを待っていた。

ペンションを経営する夫妻のことを考えていた。あのオーナーは、結婚する時に、年の差とか考えなかったのかな。

魚が喰いついて糸を引っ張る。少し泳がせてから引き上げると、ニジマスだった。

「晩飯、ゲット」

クーラーボックスに、魚を入れ、再び釣り糸を垂らす。

クラスには経験済みのやつらもいる。それに、僕は桜が以前付き合っていた男のことも知っている。桜だってきっと、経験しているんだ。情けないけど、やっぱり嫉妬はする。

父さんが持たせてくれた小さな箱は、旅行バッグの一番奥深くに忍ばせてきた。一応、男のたしなみだと思って。でも、僕にそんな勇氣はない。

そういうことをするタイミングって、どういうものなんだろう。キスをして、それから、どういことをすればいいのか。郡司と見たアダルトビデオで学習済みだ。でも、僕は、あれがとても感動的なものだとは思えなかった。

好きな人と結ばれるってことは、もっと、神聖なものなんじゃないのかな。

「ねえ、光介、引いてるよ」と、桜に言われて、慌てて竿を引き上げた。魚に逃げられた後だった。

「どう？釣れた？」

「全然」

「桜は場所を変えすぎなんだよ。釣りってというのは、ある程度待たないと」

桜は、釣り竿は置いて、僕の隣に座った。

僕は、桜と付き合うようになって、初めて素直に話せる気がした。それは、この自然の中、心が開放的になったのもあるかもしれない。自然が、森が、川が、風が、僕を見守ってくれているというのがあったかもしれない。

「僕はさ、桜より年下だっていうことを結構気にしているんだ。桜が望むような、デートもできない。カッコよくエスコートもできない。女の子と付き合うの自体初めてで、どうしていいかわからないっていうのもあって」

桜は、「うん」と相槌を打った。二人で水面を見つめた。鳥や、セミの鳴き声が聞こえる。「付き合ってから、一緒にいると意識しちゃって、上手く話せなくなっちゃったし」

「意識？」

「嫌われるのが怖くなっちゃって。こんな話をしたら、バカだと思われるかなとか」

「そんなこと、思わないよ」

「手をつなぐタイミングとか、キスをするタイミングとか、いつ抱きしめたらいいのかとか、エロいことも考えるし」

桜は、吹き出した。

「ほら、笑うだろ、そうやって」と、僕がむくれると、「ごめん、ごめん」と、桜は言った。

「あ、引いてるよ！」と、言われて、釣り竿を引き上げる。今度は逃さない。桜がうれしそうに、魚を針から外した。

僕は、また糸を垂らした。

「嫌われることが怖いって、何もしないでいるよりも、どうしたらもっと好きになってもらえるかって考えた方が楽しいと思わない？どうしたら、自分も相手も楽しくなれるかって考えた方が」

桜が言うことはもっともだった。

「それに、努力しても年の差って変わらないんだから」

意味ありげに、桜が僕の顔を見て笑う。

「何だよ」

「やっぱり、エロいこと考えるんだと思って。今回の旅行もちょっと期待していたりして」

かなりの凶星だ。でも、さすがにそんな勇氣はない。郡司も、晶先輩もいるのに。僕はそんなに神経が凶太くない。

「期待もしたけどさ、まだいいよ。今日みたいに、こうやって話すのも楽しいし」

遠くで、郡司が「おーい」と呼ぶ声がする。その声の方を見ると、手をつないだ郡司と晶先輩が見えた。

「光介、私、光介とするキス、すごく好きだな」

僕は、恥ずかしくて、桜の顔を見ることができなかった。

近付いてきた、郡司と晶先輩の変化は明らかだった。別の意味で。

「いやー。川の水って冷てえなあ。落ちちゃったよ」

二人ともぬれ鼠だ。

「まったく、そそっかしいんだよ、郡司は」

晶先輩がブツブツ文句を言っている。

「だから、悪かったって」

「助けてくれて、ありがと」と、小さな声で晶先輩が言った。

僕には、二人の間に起こったことはわからなかったけれど、少しだけ顔が赤い晶先輩は、いつもの近寄りがたい雰囲気ではなかった。

釣った魚、それから、とれたての野菜、肉のバーベキュー。肉を焼くのは、男性陣の仕事だった。

晶先輩は、桜のことが好きなんだよな。

そう思って、時々二人を見る。奥さんを交えて、三人で話している。晶先輩の気持ちまではわからなかった。

お腹がはち切れそうなほど、料理を食べて、最後は、奥さん特製のフルーツケーキをごちそうになった。

「甘いものは別腹」と言って、ケーキをほおぼる女性陣は、とてもたくましかった。

郡司と一緒に風呂に入った。子供の頃以来だ。郡司にのぞきこまれる。

「あのね、あまり立派なものじゃないんで、見ないでもらえますか？」と言うと、郡司は笑って、「いやあ、ご立派ですよ。光介君。女泣かせになりそうですねえ」と言った。

「ところで、光介、今晚、姉ちゃんとやるのか？」

「そういうのはさ、当分しないことにした。焦らなくてもいいかなと思って。桜が逃げていくわけじゃないし」

郡司は、湯船のお湯で顔をばしゃばしゃ洗った。

「俺さ、晶とキスしたんだ。女の唇って、やわらかいんだな。でも、やっぱり、気づいちゃった。晶が好きなのは、俺じゃない。だからこれからは、晶を応援しようと思う。生きにくいこと、たくさんあると思うから。友達として、応援することにした」

郡司は、何度も何度も顔を洗った。

泣いているのを隠すみたいだった。

風呂から上がって、部屋に戻った。髪を乾かすこともなく、郡司は寝息をたて始めた。夏とはいっても、信州の朝は涼しいだろう。僕は、郡司に布団をかけてあげた。

何となく、寝付けなかった僕は、ふらりと外に出た。オーナーが、中庭のベンチに寝転がって星空を見ていた。

「こんばんは」

僕に気付いたオーナーは、起き上がるとベンチを勧めてくれた。

「きれいな星空ですね」

「そうだろう？俺は、これを毎日見たくて、信州に越して来たんだ。冬の空気が澄んだ日なんかは、特に見事だよ」

「いつ、こちらに？」

「二十八の時だ。田舎に住んでみませんかという、過疎化防止のためのキャンペーンを町ぐるみでやっていてね。それで、こっちにきて農業の手伝いをして、かみさんに会った。田舎言葉になれない俺と関わってくれたんだ。気立てもよくて、ま、一番の決め手は料理がうまかったってことだ」

オーナーは、豪快に笑った。

「胃袋をがっちり掴まれたってことですね」

「そういうこと」

失礼だろうか。でも、僕はどうしても聞きたかったことを聞いた。

「僕にも年上の彼女がいるんだけど、年の差って気になりませんでしたか？」

オーナーはキョトンとした顔をした。

「年上の女房は、金のわらじを履いてでも探せって言うぞ」

「そうかもしれませんが」

「くくっ」と、おかしように笑う。

「二十八の時に見た、三十八の女っていうのは全然気にならないもんだ。もし、俺が十歳の時に、二十歳のあいつを見ても、恋愛対象にはならなかっただろうけどね」

僕の中で、価値観が崩れた瞬間だった。

そうか。そういうものなんだ。

僕は、まだ高校生だけど、年をとったら、桜の年なんて気にならなくなる。僕が、二十歳の時、桜は二十三歳。僕が、五十歳の時、桜は五十三歳。

僕が悩んでいたことは、あまりにもちっぽけなことだったんだ。

僕は、この旅行で、少しだけ大人になった。

旅行から帰ってきて、玄関で「ただいま」と言うと、中から「おかえり」という声が聞こえてきた。父さんの声だけじゃない。涼子さんの声も重なっている。

「涼子さん、来てたんだ」

「うん。おかえり、光介」

涼子さんが一瞬母さんのように見えた。いや、そんな気がしたんだ。母さんの雰囲気とか、顔とか、あまり覚えていないんだけど。すごくやさしそうで、やわらかく笑うものだから。

「荷物置いて、手を洗ってきてなさい」

「ああ、あ、お土産買ってきたから」

「うん」

父さんは父さんで、いつもの父さんじゃないみたいだ。しっかりしていないのはもともとだけど、さらに輪をかけてというか。旅行に行く前は、あんなに余裕があって、えらそうだったのに、この豹変ぶりは何だろう。

これは絶対に何かあるなと思った。

洗面台で手を洗う。その時にちらっとバスルームの方に目がいく。父さんのことだから、涼子さんとお風呂に一緒に入ったりしたんだろうか。それで…。我ながら、貧困な想像力だ。僕はぶるぶると頭を振った。

「はい、これ、地酒ね。後で、二人で飲んだらいいよ」

父さんは、ありがとうと言って受け取った。

「純米酒か。うまそうだな」

「お店の人の一押しだから」

父さんは黙った。涼子さんもしゃべらない。何だ、この沈黙。

「どうかした？あ、もしかして、入籍のこと？じいちゃんたちに挨拶に行くのとかで困ってて、僕に間を取り持って欲しいとか。いいよ、それくらい」

「それもある」

それも？

「涼子、光介に見せてあげて」

涼子さんが、テーブルの上に手帳を出した。アンパンマンの絵…。

「母子…手帳…って書いてあるけど。どうしたの、これ。簡単にくれるものなの？それとも、お医者さんって持っている物？あ、父さんって産婦人科医だから、手に入りやすいんだよね、きっと」

「子供ができたの。周平の。光介に弟か、妹ができます」

涼子さんの顔をまじまじと見た。少し頬が赤い。なんだ。優しい顔してるって思ったのは、これだったのか。

僕は父さんの顔を見た。涼子さんはすっかり「お母さん」の顔つきなのに、父親ってのは何なんだらう。

「順番がめちゃくちゃで、本当にすまない。それに、多分光介の受験勉強のさなかに、夜泣きも

すると思う。何と言うか、私も考えなしというか...」

父さんがさらに謝ろうとしたので、僕は母子手帳を見ることでそれを遮った。

「おめでたいことなんだから、謝るなって。情けないな」

ひとり言のようにつぶやく。

本当は僕だって照れくさくて、そして、嬉しくて仕方がないんだ。だって、今まで寂しかったのに、一気に家族が二人も増えるんだ。自分の大切な人、その相手が父さんってのは少し微妙だけどね。

「おめでとう。父さん。涼子さん」

改めてそう言うと、二人は照れくさそうに笑った。僕は、初めて、母親になろうとしている人、父親になる人を、近くで見た。（あ、もちろん、父さんは父親をやって来たんだけどね）

## 終章

---

寺島光介、高校二年生。

高校生の僕にとって、大人になるまでの時間は果てしなく遠い。どんなに頑張っても彼女との年の差は埋まらない。背も急には伸びないことを知った。

僕の夢は、尊敬する父と同じ産婦人科医になって、命の生まれる瞬間に立ち会い続けること。その夢の前に、成績の悩みなんて取るに足らないものであることを知った。

女癖の悪い父親は不器用で、僕が思っていたよりもずっと純粹で、深く人を愛せる人なのだと知った。

世の中は僕が思っているよりもずっと複雑だけれど、解決できない悩みなんてない。僕の悩みなんて、どれもみんなちっぽけなものだ。

僕は、幸せになるための方法を知っている。それは全部父さんが教えてくれたことだ。

明日、僕は17歳になる。そして、来年の今頃には、きっとかわいい弟か妹の世話を手伝っているはずだ。

(了)

## あとがき

---

こんにちは。このたびは、「僕らの事情1」を読んでもくださり、ありがとうございました。

こんな親子がいたら面白いなあ、と思って書き始めたのが本作品です（その分、光介は気苦労が多かったですが）。

完成までに少し時間がかかってしまったので、途中でダウンロードして読まれた方には、大変申し訳ないことをしてしまいました。

光介のようないい子ちゃん、そして周平のような困った親。二人を書くのはとても面白かったです。

「僕らの事情」は、連作にする予定です。次回作もお願いします。

感想や、文章表現についてのご指摘などお待ちしております。

2010年 11月 27日

澤村多門